

私の Bangladesh の友人が、 Bangladesh 南端のクアカタで、「Alo Aro Alo Foundation (光をもっと光を基金)」を作り、活動を始めた。友人は私に、その組織の目的が、「クアカタ周辺のラカイン族仏教徒の生活支援」であると、説明してくれた。私は仏教徒がミャンマーとの国境沿いのラムやコックスバザールに住んでいるのは知っていたが、遠く海を隔てたクアカタ周辺にも居住しているということは知らなかった。しかも彼らはラカイン族としての習慣を保持しながら、その地でヒンドゥー教徒やイスラム教徒とうまく共存しているという。昨今、ロヒンギャ問題を巡って、ミャンマーでは過激派仏教徒のイスラム教徒襲撃事件が度重なっており、アウンサンサーチャー氏も対応に苦慮している。また Bangladesh では2012年にラム市で過激派イスラム教徒の大規模な仏教寺院焼き討ち、仏教徒襲撃事件が起きた。 Bangladesh 内のイスラム過激派は、仏教徒襲撃などを利用して政権転覆を狙っていた。両国におけるそのような現況の中で、クアカタではイスラム教徒と仏教徒が仲良く暮らしているという。私はその情報の真偽と、彼らの現状をこの目で確かめたいと思い、友人に案内してもらい、クアカタに足を運んだ。



※以下の過去の私の小論を参照していただきたい。

- ・「 Bangladesh から見たロヒンギャ族問題」
- ・「ラム市でのイスラム教徒の仏教徒襲撃の真相」
- ・「アルカイダ、ジャマティ・イスラミ、969運動」
- ・「ロヒンギャ問題の解決策」

クアカタへは、ビジネスマンなどは、まずダッカからポリシャルへ飛行機で40分ほど飛び、そこから車で約3時間走るというコースを取る。ただしこのフライトは週3便しかなく、今回、私はスケジュールが合わなかったので、ダッカから船でポリシャルまで川を6時間下るといったコースを取った。この船は一般の Bangladesh 人の重要な足となっており、3等船室では汚いシートの上で多くの人が、大量の雑多な荷物といっしょに雑魚寝しており、その雑然かつ混沌とした船内の状況は、私に Bangladesh そのものを感じさせた。船外に目を転じてみても、船は一貫して泥川を下るのみで、そこから情緒を感じることはまったくなかった。私たちはクーラーの効いた1等船室(約1400円)で、ゆったりと座り、雑談をしたり本を読んだりしていたので、時間をもてあますことはなかった。ただし帰路は深夜便で、川を上ったので9時間ほどかかった。特等寝室(約8500円)を用意してもらったので、私はずっと寝ていた。ポリシャルからクアカタまでの道路は往復2車線、簡易アスファルト舗装で悪くはなかった。

クアカタに住んでいるラカイン族については、まだ学術的な研究は行われておらず、その歴史は詳らかではないが、私が現地で聞きかじったところによると、下記のようなものである。ラカイン族は、紀元前、ミャンマーのアラカン山脈の西部からベンガル一帯に住んでいたという。そこには釈迦の初期仏教が直接伝えられたようである。ちなみに Bangladesh の西方のパールプールは、8世紀初めアジアにおける仏教の中心として栄えた。今、この地に残る巨大僧院跡は世界遺産に登録されている。その後、初期仏教はヒンドゥー教やイスラム教に押され、姿を消した。約1000年後、ミャンマー西部にアラカン王国が勃興し、ベンガル一帯にまで勢力を伸ばしたが、その後、1600年代後半にベンガル一帯がムガル帝国に、1700年代後半にミャンマーのラカイン一帯がビルマ王国に侵略され、ラカイン族は大きく二つに分断された。その後、ベンガル一帯に住んでいたラカイン族仏教徒はヒンドゥー教徒やイスラム教徒の浸出により、その地で少数派に追いやられた。それでもラカイン族はアラカン王国時代から続くミャンマー経由の上座部仏教を信仰し続けた。

クアカタ周辺には、現在、仏教徒約3万5千人が住んでいる。クアカタ周辺の人口は約30万人と言われており、仏教徒は12%弱と見られている。なおクアカタという地名は、「クア(井戸)を(カタ)掘る」というところから来ていると言われており、そこからは、ラカイン族が先住民として、この地を開墾し定着するため、懸命に努力したことがうかがわれる。ラカイン族の顔つきや体型は、明らかにベンガル人とは違い、東洋人そのものである。なによりも、ラカイン族女性の多くが、ミャンマー女性と同じく、顔を白く塗る「タナカ」という化



粧を施しており、ミャンマー人の伝統衣装であるロンジー(巻きスカート)を穿いていることから、ベンガル人とはまったく違う風習を守って、生活していることがよくわかる。

クアカタ周辺には仏教寺院が60箇所あると言われており、平均すると600人(50〜60家族)に1寺院の割合で存在していることになる。残念ながら今回は入手できなかったが、その所在地を表す地図も作成されているという。手当たり次第に、寺院を訪ねたみたところ、敷地内に立派なパゴダを持っている寺院から、大仏を本尊にしている寺院、粗末な家の中に小さな仏像が飾られているだけの寺院まで、いろいろであった。ただし約5年前、私がラム市で見た寺院と比べると、この地の寺院は新しく、規模も小さいように感じた。寺宝の類いも金製品が少なく、それはこの地のラカイン族の生活水準をうかがわせるものだった。

私は、「にわかブッディスト」に変身して、それらの寺院を拜んで回った。すべての寺院がミャンマー式で、門の入り口から裸足にならなければならなかった。またすべての寺院の僧侶がヤンゴンかマンダレーで修業を終えていると言っておられた。上座部仏教の教義では僧侶は働いてはならず、もちろんこの地でも僧侶の生活はすべて信者である近隣住民の喜捨で成り立っている。僧侶は信者の日常の苦悩や死への恐怖をやわらげる信仰の対象として、その尊厳を保っているようだった。



ラカイン族の一般家庭の家は意外に立派であり、そのほとんどがトタン屋根であり、草葺きや竹製ではなかった。なかにはレンガ作りのしっかりした建物もあった。ほとんどの家が高床式になっており、階下には簡単な農機具やバイク、自転車などが置かれていた。特筆すべきは、多くの家の階下に、簡単な織機が置いており、ラカイン族女性がそこで機織りの内職をしていたことである。「Alo Aro Alo Foundation



(光をもっと光を基金)」の事業の一つは、この女性たちが織った布の販売を手伝うことだという。私は販売センターでこれらの布を見せられ、意見を求められたが、かなり品質が劣り、すぐにはよいアイデアが浮かばなかった。男性は主に農業に従事しているようだ。クアカタは海に近いが、漁業はイスラム教徒が主に行っているという。ラカイン族の村内を視察中に、ちょうど昼時になったので、ラカイン族の一般家庭で食事をご馳走になった。料理はバングラデシュ風であったが、ベンガル人は食べないという貝料理なども出てきた。

昼食後、「Alo Aro Alo Foundation(光をもっと光を基金)」の代表である友人が私に、「クアカタの地で、この地の女性の生活向上のために、縫製工場を稼働させて欲しい」と頼んできた。私はそのような依頼が来ると予測していたので、「代表の気持ちはよくわかりますが、この地にはサイクロンがよく襲います。とても天災には勝てませんので、考えさせてください」とやんわりと断った。すると友人はすぐに、「サイクロン対策としては、シェルターが完備されているので問題はない」と答えた。そこで私はそのシェルターとやらを見ておくのも勉強になると思い、それを見に行ったところ、彼らがシェルターと呼ぶものは、学校などに使用されている鉄筋入りレンガ作り建物であった。建物は頑丈そうで、サイクロンにも耐えられそうであり、それはほぼ各村に一個所設置されているという。私の事前調査では、ベンガル地方におけるサイクロンは、4〜5月、9〜12月の年2回襲ってくるということで、ことに11月はひどいという。しかもほぼ3年周期で大災害をもたらしており、2007年11月のサイクロン被害は、死者4000人超、被災者約900万人に及んだという。「残念ながら、この巨大なサイクロンにシェルターだけでは、とても勝てない」と私は思ったので、以後、縫製工場建設の話をしてできるだけ避けるようにした。



それでも友人は私に、「クアカタの土地は1エーカー=300万タカ(約430万円)。ワーカーの月給は4000タカ(約5800円:ダッカ周辺の半分以下)。建設中のパドマ橋が完成すればダッカから車で6〜8時間。チッタゴンへの船便もあり輸出入にはダッカより便利。電気も火力発電所ができれば万全」などと、話し続けた。それに対し私は、「サイクロンの暴風雨や高波対策にカネがかかり、とても縫製工場の経営は難しいだろう」と、明確に答えたので、二人の間にしばらく



気まずい空気が流れた。

しかし私にとっては、このシェルター視察は、大きな意味があった。その小学校の校庭で遊んでいた子どもたちが、私の周囲にむらがってきたので、その子どもたちの顔を見回すと、その中には明らかにラカイン族の子どもや、イスラム教徒の子どもがいたからである。また友人がこの子はヒンドゥー教徒の子どもだと頭を指して教えてくれたが、その判別はできなかった。つまりこの小学校では、仏教徒・イスラム教徒・ヒンドゥー教徒の子どもたちが、いっしょになって一つの部屋で学んでいるということであり、この村にはその親である仏教徒・イスラム教徒・ヒンドゥー教徒が仲良く、いっしょになって住んでいるということである。私が友人にそれを確認すると、友人は頷きながら、この村には仏教寺院、モスク、ヒンドゥー教寺院が、それぞれ建っていると説明してくれた。

友人はクアカタ周辺の観光地としての可能性にも注目しており、浜辺やマングローブ林などを案内してくれた。彼はクアカタを、バングラデシュで海の観光地として名高いコックスバザールのように、開発したいと望んでいた。私はコックスバザールに行ったことがあるが、そこは決して綺麗な浜辺とは言えず、綺麗な海岸を知らないソバングラデシュ人ならば観光に訪れるだろうが、多くの外国人が押し寄せるような場所ではないと思っている。クアカタも同様で、海は泥で濁っており、とてもサンライズとサンセットだけでは、外国からの観光客の誘致は無理だと思った。

あまり興味を示さない私に、友人はこの近くに中国と韓国の共同による火力発電所の建設が開始されており、しかもその側に深海港と工業団地の建設が計画されているので、そこに案内するという。私は友人に連れられて、クアカタからポリシャルの方へ40分ほど車で戻り、海に近い河岸に行き、そこから木造船に乗った。河口を海に向かって40分ほど下ると、川岸に10艘あまりの船が横付けされており、そこからパイプが陸地に向かって伸びていた。川の中程で泥を浚渫し、陸地を埋め立て、そこに火力発電所や深海港、工業団地を建設するのだという。その様子だけでは、その真偽のほどを判断するのは難しかった。それでもなにかの大型プロジェクトが進行中であることは確認できた。



今回のクアカタの地の訪問は、私の死生観に、新たな視点を付け加えるよいきっかけとなった。

私は日本の高齢者の「終の棲家、つまり死に場所」の条件を、今のところ次の様に考えている。私はこれらの視点で今後も、「死に場所探し行脚」を続けようと考えている。

- ①その地の生活費が安いこと(老後破産を防ぐため)
- ②その地に医者がいないこと(ムダな延命治療を避けるため)
- ③親族がすぐに駆けつけることができない遠方の地であること(身内の誰にも世話をかけずに、静かに死ぬから)
- ④死んだ後の処理が希望通りに行えること(日本では葬送の自由が確保されていないから)
- ⑤楽しくしねる場所であること
- ⑥死そのものが社会的価値を持つこと

これらの条件に照らし合わせると、クアカタを死に場所として選定した場合、以下のようなことになる。

- ①顔付きも日本人が違和感を覚えない仏教徒の女性がたくさんいるため、安価な介護人材が豊富に存在しており、老後破産状態は防げる。
- ②近代的な医療施設もなく、医者もいないので、ムダな延命治療を施されることはないので、日本の高齢者の医療費のムダ使いもなくなる。
- ③日本からは遠方であり、この地を訪れるには時間も費用もかかるので、あまり親交のない親族は訪問を諦めてしまだろう。この地なら親族をバタバタさせず、迷惑を掛けずに死ぬ。
- ④クアカタでは土葬・火葬・自然葬などが行われており、望めば水葬も可能なようである。葬送の自由は確保されている。僧侶もいるので、読経も可能である。
- ⑤ただしクアカタの情景は、感動的ではなく、私を含めた日本人は、そこで死にたいとは思わないだろうし、楽しく死ぬ場所でもない。
- ⑥クアカタで死んでも、それに大きな社会的価値はないだろう。ただし大量の日本人高齢者がこの地を死に場所として選び移住してきた場合、その経済効果は大きい。



《裕福なラカイン族の土葬墓》

以上